

# 「釜ヶ崎労働者の現在」を考える

福原宏幸

大阪市立大学助教授  
本会理事

## I

『市政研究』本誌は、「釜ヶ崎労働者の現在」と題する特集である。このテーマは、実は『市政研究』編集部において数年前から取り上げることが検討されてきた。にもかかわらず、これまで先送りされてきたのは、その問題のデリケートさとそれに対応すべき行政側の課題の困難性による。とはいえ、緊急性を帯びたこの課題をいつまでも先送りばかりしておくことは、適切さを欠いた対応であろう。そうした反省の上になつて、このたびこの特集を組むことになつた。

この特集では、八木 正氏をはじめ五氏の執筆者の協力を得、それぞれの論文では貴重なご指摘をいただいた。とは

いえ、釜ヶ崎の実態をつぶさに捉えきれたかといえ、今回の特集では幾分不十分であろう。本特集のこうした不十分性をいくらかでも補うことを意図して、この小論を寄せることにした。なお、この小論は、編集部の議論を反映するものであるが、文責はあくまで筆者にあることを記しておく。

この特集を組むに至つた直接の契機は、一九九二年一月に生じた釜ヶ崎労働者の騒動とその原因となつた大阪市応急援護金縮小の問題であつた。大阪市の対応は適正を欠くものであつたといえよう。しかし、こうした行政当局の対応のまずさの重大性もさることながら、釜ヶ崎労働者の置かれていた現状は近年大きく変化しており、行政施策はそうした変化に十分対応できているのが根本的に問われて

いる。そして、この特集を組んだ理由も、そうした事実を明らかにし、そして行政の新たな課題を検討しようというところにある。

## II

釜ヶ崎労働者の労働がきわめて不安定であることは広く知られている。しかし、その詳しい実態を知る人はそれほど多くない。島 和博論文は、日本の労働市場構造の中に釜ヶ崎労働者を位置づけ、この点を明らかにしている。

ところで、近年大きな問題は、経済不況の中で仕事にあふれ、ドヤに住むことさえできない野宿者の数が増えていることである。行政は彼らに何らかの新たな対応策を打ち出すことが必要であろう。しかし、この野宿者の増加の背景には、経済不況という景気循環的な要因だけでなく、構造的な要因が横たわっている。それは、八木氏の《巻頭言》にも述べられてるように、建設土木業の労働者調達方法の変化である。

もうひとつの変化は、野宿を余儀なくされる釜ヶ崎労働者は、おしなべて高齢者が多く、その増加は近年著しいという点である。彼らは、不況の波をもろに被っているだけでなく、先に指摘した労働力需要構造の変化にともなつて日雇

い労働にありつく回数が減少している。

こうした釜ヶ崎労働者の高齢化と野宿者の増加は、彼らに対するこれまでの行政施策の根本的見直しを迫っている。即ち、高齢者向け労働機会の斡旋の重視と、それに加えて福祉と医療の総合的施策の充実が必要となつている。

さらに、釜ヶ崎地域内にある医療機関「大阪社会医療センター」の関係者によれば、同病院を一旦退院しても、仕事にあふれと福祉施策の不十分性によつて再び入院してくる労働者があとを絶たないという。すなわち、労働紹介、福祉、医療が別々になつていくタテ割行政が、労働者の生活の自立を支援するのに十分機能していないのであり、より総合的な施策の展開が必要となつている。

## III

ところで、釜ヶ崎の抱える問題の困難性は、仮に行政当局がこうした施策の転換を自覚したとしても、なおクリアすべき課題が存在することにある。それは、こうした施策の転換には多くの財源を必要とするが、その財源の支出にあつて市民的合意を得ることができるといふ点である。

釜ヶ崎労働者に対する一般市民の眼差しには、厳しいものがある。彼らは、日雇い労働者であること、定住場所を持

たないこと自体が市民的な生活規範から逸脱しているとして蔑視され、さらに怠惰、無規律、非常識などといった増幅された偏見・差別にさらされている。多くの市民は、釜ヶ崎労働者の生活や労働をマスコミを通してその表層しか理解しない。また、それぞれの市民は、市民社会の中で自らが多数派に属していることによって無条件に自分達の労働・生活文化を正当化し、その視点に立って釜ヶ崎労働者の生活・文化を異端視する。日本の市民社会には、たとえば会社人間や受験競争のような問題があるにもかかわらず、いざ釜ヶ崎に目をやる場合にはそんな市民社会の矛盾をたちどころに忘れて差別する。

就労機会の不安定性によって不本意ながら仕事に「あぶれ」、昼間街中でたむろしていると、一般市民からは怠惰な人々として蔑視される。こうした市民社会の釜ヶ崎労働者への眼差しを、克服していく手だてを探ることも、行政の仕事ではないだろうか。

とくに釜ヶ崎では、東京の山谷や川崎の寿町と異なつて、地域内のドヤ住まい労働者には在宅での生活保護は適用されてない。これには、単身日雇い労働者の層が厚い釜ヶ崎でこの種の生活保護を適用すれば、莫大な費用が必要になり、これに対する大阪市民からの苦情が殺到するのを行政がおそれて実施しないのだという話もある。それが事実な

ら、批判されるのは、市民だけではなく、それ以上に市民に対する啓発活動を怠っている行政の側にあるといえよう。

#### IV

ところで、平川 茂論文では、釜ヶ崎労働者の生活文化の一端がうかがえる。この論文では、市民社会の規範からみれば否定すべきものである「暴動」が、これまでのところ釜ヶ崎労働者にとっては自分達の権利や地位を守り引き上げるための唯一の手段であることが、明らかにされている。ただし、著者は、それを全面肯定しているようではないが。

釜ヶ崎労働者の世界には、市民社会とは異なつた生活文化がある。ひとつの側面は個人の自立を重んじるものであるが、それは時として日雇い仕事をめぐる激しい個人間競争となつて立ち現れる。もうひとつは、それとは対極の連帯・共生の意識である。これは同じ社会的境遇にあるというだけでなく、生活空間を共有することによって生まれたのである。そして、釜ヶ崎労働者の生活文化には、これら相反する二つの要因のせめぎあい、両義性が存在している。青木秀男氏の言葉を借りれば、それは「ある者はラーメン一杯で無二の親友を裏切る。ある者はラーメン一杯で見知らぬ人に心を委ねる」(青木「寄せ場労働者の生と死」明石書店

一九八九年、一七七頁)という世界である。

とはいえ、連帯や共生は今日の市民社会では希薄になつてきており、これとの比較で釜ヶ崎労働者の連帯・共生の文化をみると、ひととき瓦解立っている。そして、釜ヶ崎労働者でなくとも、彼らの生きざまや生活文化に魅力を感じて、彼らと付き合つたり釜ヶ崎地域に出入りする人々も多い。たとえば、釜ヶ崎地域内に住み、地域労働者の支援活動を行っている私の友人に言わせれば、「カマの労働者といると、本音で話ができる。仲間として分け隔てなく付き合つてくれる、そんなあなたかきがある」という。ありむら潜在的マング「釜ヶ崎(ドヤ街)まんが日記」(日本機関誌出版センター、一九八七年)に描かれ、庄司丈太郎の写真集「明日また 釜ヶ崎・沖繩 アバ、アチャ イチャラヤ」(現代書館、一九九二年)に写し出された釜ヶ崎労働者には、たしかに競争に明け暮れる市民社会の人々とは異なつたある種の心の豊かさのようなものを感じさせる。

こうしたことを考えれば、釜ヶ崎労働者に対して労働紹介、医療、福祉の総合的な施策の展開が必要だとはいえ、それは行政による一方的な施策の提供ではなく、この地域住民の持つ共同体的な生活文化の良さを生かした形での運用と、労働者の自立と相互扶助を進める方向が重要であろう。さらにまた、施策の企画、決定、実施にあたっては、彼ら

との対話、参加の機会が与えられるべきではないだろうか。

#### V

本特集では、さらに平野敏論文で釜ヶ崎労働者に対する自治体行政の課題が、反省をも踏まえつつ具体的に提起されている。直接に釜ヶ崎労働者に関わる職場で働く労働者の意見として、傾聴に値する。

また、青木秀男論文では、近年増加しつつある外国人労働者と釜ヶ崎の関係が分析されている。東京や神奈川では、外国人労働者の就業実態について自治体も積極的な調査を実施しているのに比べ、大阪ではその動きは未だにないようだ。そうした中であつて、その実態に迫つたという点において、青木論文の意義は大きい。

「釜ヶ崎労働者の現在」を語るにあたって忘れてはならない重要なものに、地域内で活動する多くの労働者団体、支援団体、ボランティア団体がある。こうした団体の活動についての紹介が欠落してしまったことは、本特集の欠点と自覚している。行政が釜ヶ崎労働者に何らかの施策を打ち出す場合、日頃地域で活動し、地域労働者の実態を直接に知っている彼らの考えや活動の手助けなしにはやっていけない。こうした課題については、いずれ補足していきたいと思う。